

「魔法の言葉」活動報告書

報告者氏名： 佐島 順子

所属： 葛飾区立住吉小学校

記録日： 平成30年2月15日

キーワード： 見えにくさ、情報保障、自己認識、自己肯定感、自己理解

【対象児の情報】

○学年 小学校6年生

○障害名 視覚障害

○障害と困難の内容

視力（遠） 右0 左（0.08）

先天性の弱視であり、眼鏡をかけているが視力の矯正はほとんどきかない。右目は義眼を装用している。遠見に比べるとわずかに近見視力の方がよく、また、眼前2cmに近づけると0.8の視標を認知することができる。単眼鏡を使用すると0.8の視認力が得られる。

【活動目的】

○当初のねらい(計画書の学習目標)と活動による方向性の確認状況

- (1)視覚障害があることも含めた「自分」を知ること、得意なことを生かし、苦手なことは道具や方法を工夫しようとする。
- (2)目的に合わせて視覚補助機器を活用する。

○実施期間 平成29年4月～平成30年3月

○実施者 佐島 順子 渡邊 歩未

○実施者と対象児の関係 本児童が自校通級している弱視通級指導学級担任

【活動内容と対象児の変化】

○対象児の事前の状況

- ・通常の学級に在籍。弱視通級指導学級へ週2回計4時間の自校通級。
- ・単眼鏡（遠用弱視レンズ）を個人所有。校内では単眼鏡を携帯し、授業中は単眼鏡を使用して板書を視写している。在籍学級では最前列中央の座席。拡大教科書を使用（22ポイント）。
- ・文章を読んだり、文字等を書いたりすることを億劫がる。授業中の説明や発表などを聞いて覚え理解する。じっと聞いているときや考えているときに左目を指で押す。
- ・全校集会などの他学年の児童がいる場で単眼鏡の携帯や使用には抵抗がないが、iPadを使用することにはためらいがある。
- ・見えにくさによる困難や危険が想定される活動に対しても、友達と同じようにできると思うなど、自身の障害や特性を十分理解できていない面がある。（例：遠足でのフィールドアスレチック、体育の球技など）
- ・見えにくさを理解して接してくれている友達に対し感謝の気持ちをもっている。一方では、手助けしてもらっていることが普通になっているために甘えが出たり、支援や配慮がないことに不満をもったりする面もある。

○活動の具体的内容

(1)視覚障害があることも含めた「自分」を知ること、得意なことを生かし、苦手なことは道具や方法を工夫しようとする

- ・自己認識・自己理解の学習として、自分のよさや自分の好きなところなどを考え学習シートに書いた（5月、2月）。
- ・自分の目や見え方、視覚補助機器などの自分にとって便利な道具について、また、自分の得意なことや自分のよさ、自分らしさについて考え、言葉で表現するようにした。
- ・1学期末の上級学校見学に向けた事前学習として、自分の見え方の状態や学習の方法などを含めて自己紹介の練習をしたり、各校の知りたい事柄を考えたりして見学に臨んだ。
- ・自己認識・自己理解の学習のまとめとして、自分の見え方や便利な道具、自分らしさなどを「自己紹介カード」にまとめた。

（使用アプリ：「Simple Mind+」「Power Point」）



図 1-① 使用アプリ

(2)目的に合わせて視覚補助機器を活用する

<見る・記録すること>

- ・在籍学級の授業で板書を視写する際に単眼鏡と併用して iPad を使い、視写しきれなかった板書を写真撮影して家庭学習で利用できるようにした。
- ・教室内の授業時以外の場で、カメラ機能を使って友達と同じものを見る体験が共有できるようにした。

（使用アプリ：「カメラ」）



図 1-② 使用アプリ

<調べること>

- ・漢字や言葉の意味、関心のある事柄を辞典アプリやネット検索で調べられるようにした。

（使用アプリ：「例解学習国語辞典」「常用漢字筆順辞典」「Yahoo!きっず」）



図 1-③ 使用アプリ

<資料を読む・書き込むこと>

- ・社会科資料集や家庭科資料集、移動教室のしおり、学芸会の劇台本、プリント類を PDF データとして取り込み、自由に拡大して見たりメモを書き込んだりできるようにした。

（使用アプリ：「UD ブラウザ」）



図 1-④ 使用アプリ

<教科学習の補助と余暇活動>

- ・NHK for School や Daisy 教科書を使って事前学習することで学習に見通しをもち、自信をもって在籍学級の授業に臨めるようにした。

（使用アプリ：「NHK for School」「デージーポッド」）

- ・音声付き読書アプリを使い、物語に親しめるようにした。

（使用アプリ：「Kindle」）

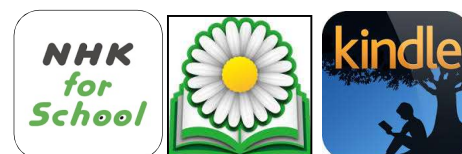


図 1-⑤ 使用アプリ

○対象児の事後の変化

(1)視覚障害があることも含めた「自分」を知ること、得意なことを生かし、苦手なことは道具や方法を工夫しようとする

①自分を客観的にとらえようとするが増えた。

年度当初、在籍学級の廊下に掲示された自己紹介のカードには、自分は目が悪いことや単眼鏡を使っていることなど、弱視であることを隠すことなく自分らしさの一つとして書いていた。一方で、自己認識の学習として取り組んだ学習シートでは、「自分のどんなところが好きか」「自分はどんな人だと思うか」などの質問に対し熟考することなく書き込んでいた。これまで自分自身の内面をじっくり

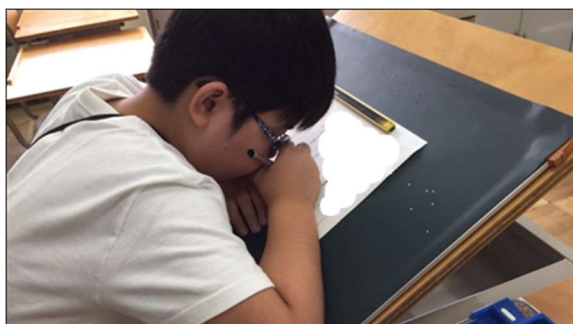
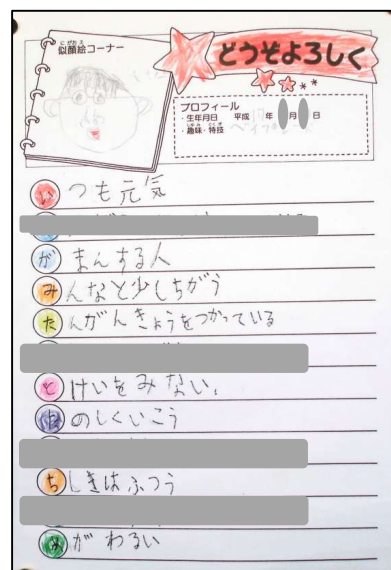


図3 シートに書き込む

り見つめる経験が少なかったことが考えられた。

2月、同一の学習シートを用いて自分を見つめる学習を行った。年度当初と

異なり、時間をかけ真剣に考えている様子だった。また、「自分の好きなところ」や「きらいなところ」について、友達とのかかわりの中での自分をみつめていることが分かる言葉が書かれていた。



とらえようとするが増えた。

年度当初、在籍学級の廊下に掲示された自己紹介のカードには、自分は目が悪いことや単眼鏡を使っていることなど、弱視であることを隠すことなく自分らしさの一つとして書いていた。一方で、自己認識の学習として取り組んだ学習シートでは、「自分のどんなところが好きか」「自分はどんな人だと思うか」などの質問に対し熟考することなく書き込んでいた。これまで自分自身の内面をじっくり

り見つめる経験が少なかったことが考えられた。

2月、同一の学習シートを用いて自分を見つめる学習を行った。年度当初と

異なり、時間をかけ真剣に考えている様子だった。また、「自分の好きなところ」や「きらいなところ」について、友達とのかかわりの中での自分をみつめていることが分かる言葉が書かれていた。

図2 在籍学級の廊下掲示物

②視覚管理への意識が少しずつ芽生え、行動に結び付くが増えた。

これまで母親に義眼を入れてもらっていたが、7月上旬の眼科相談で眼科医から自分でできるように練習するとよいと言われた。さらに、5年生の児童が既に自分で行っていることを聞き、ようやく挑戦する気持ちになった。夏休みのプールで登校したとき、「先生、できるようになりました！やってみたら簡単でした！」と自慢そうに笑っていた。

また、運動会前にスポーツゴーグルを購入し、組体操や騎馬戦で使用した。その後の体育の授業では、在籍学級担任と相談しながら球技運動の際などに使用している。

③いろいろな面をもつ「自分」について考えるようになり、また、言葉で表現しようとするようになった。

今年度、週4時間の通級による指導のうち1時間を、弱視の状態に近い6年生男児と2人で学習している。これまでもお互いのことを何となく分かっていたようだが、利き目や義眼について、また、どの程度見えるか、どのようなときに困るかなどを伝え合う中で、自分のことを考え言葉にしようとする姿が多くみられた。

Simple Mind+を使い、身近な事柄をテーマにして日常の思いを言葉で自由に表現するようにした。心のつぶやきを自分自身で見ることができ、自分自身の内面を見つめることができた。

2学期末から、自分の目や見え方、便利な道具、日常生活での配慮を中心に自分の得意なことなども盛り込んだ「自己紹介カード」の作成を開始した。自己紹介としてどのような内容を盛り込むかを考え、項目をノートに書き出した。本児童の希望で、パソコンで入

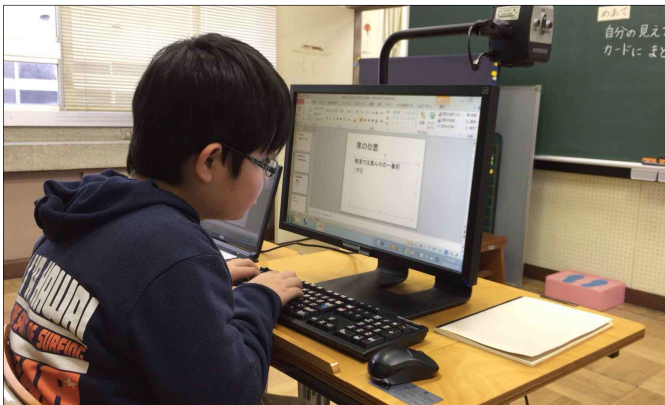


図5 自己紹介カードを作る



図4 マインドアプリを使う

力してカードに印刷し、手作りの自己紹介カードにすることになった。弱視通級指導学級にあるノートパソコンは画面が小さいため拡大読書器に接続し、Power Point を使用した。教科書についての項目では単に拡大教科書の文字のポイント数を書くだけでなく、実際に教科書の写真を撮って挿入するなど、分かりやすいように工夫していた。4月からの進学先の学校で自分を紹介するときに小道具として使えるねと話をしている。

(2)目的に合わせて視覚補助機器を活用する

①単眼鏡と iPad を併用・選択し活用することが増えた。＜見る・記録すること＞

日常の授業では単眼鏡を使って黒板を見たり視写したりしている。板書視写に関して、これまでは正確さは良いものの速さの面で課題があったが、正しく早く書き写すことができるようになった。首からかけた単眼鏡で見たいものをさりげなく見ている場面も多くなった。

一方で、広範囲のものを長時間見るときには、単眼鏡よりも iPad を使うようになった。区内の連合行事として狂言教室へ出かけ狂言の舞台を鑑賞するときに、単眼鏡と iPad mini を持参した。狂言についての説明のときには、舞台に立って話をしている人を時々単眼鏡で見ながら話を聞いていた。狂言が始まると iPad mini を取り出し、最初から最後までじっくりと鑑賞していた。初めて見る狂言がおもしろかったようだ。帰り道に友達と感想を伝え合っていた。また、区の連合陸上大会では、他校の児童が大勢いる中でも iPad mini を使用して観戦し、友達と一緒に応援に盛り上がっていた。(日常的には iPad を使用しているが、校外に持ち出すときは同じ設定にしてある iPad mini を使用した。)



図6 単眼鏡を使って見る(在籍学級)

②分からない漢字を自分から調べようとするが増えた。＜調べること＞

通級での学習時、分からない漢字があると自分からアプリで調べることが時々見られるようになった。手書き入力や音声入力ですムーズに調べている。在籍学級でも漢字や言葉が分からないときに活用することが増えた。また、在籍学級で移動教室の事前学習の際、日光東照宮や日光の特産物などを意欲的に調べていた。オリンピック・パラリンピックに向けた学習でも、世界の国々について調べるなど大いに活用していた。

③紙の資料と PDF 資料を同じように活用した。＜資料を読む・書き込むこと＞

移動教室のしおりの文字や図が細かいため、本児童と相談し、PDF 資料にして iPad mini に取り込んだ。昨年度から PDF 化した社会科資料集を使っているので操作に慣れており、周りの友達と同じように iPad mini を開き、しおりを読んだり書き込んだりしていた。グループの班長だったため、夜の班長会議では伝達事項をメモして班のメンバーに伝えていた。

家庭科の授業では欠かさず iPad を持参し、学習に使用した。



図 7 UD ブラウザに取り込んだ移動教室のしおり

④音声や映像を使うことで学習内容に興味をもつようになった。＜教科学習の補助と余暇活動＞

デイジー教科書と NHK for School を家庭学習で使用できるようにしたが、1 学期は、操作の仕方を覚えて通級時の学習では興味を示すものの家庭学習では十分活用できていなかった。そこで、9 月半ばの面談時に、実際に iPad を操作しながら家庭での学習にどのように生かしていくとよいかを保護者と話し合った。2 学期以降は、音声や映像の学習アプリのほかに漢字の学習にもタブレットを使い、学習に臨むことが増えた。

○その他のエピソード

弱視通級指導学級に届いた科学教育ワークショップ（広島大学 氏間和仁先生の研究室主催）に参加し、iPad を使った理科の学習を体験した。申込み時はあまり気が進まないようであったが、いざ始まるといきいきと活動していた。さらに、その後の在籍学級の理科の授業で、ワークショップで使用したアプリを紹介してみんなで一緒に学習していた。今までは iPad は学校や家庭での使用が中心であったが、校外の活動で iPad を使うことでこれまでと違うおもしろさや利便性に気付いたようであった。

【報告者の気づきとエビデンス】

○主観的気づき

- ① 見えにくさがある自分を客観的にとらえ、前向きに考えることが多くなってきたのではないかな。
- ② 目的に合わせて視覚補助機器を選んで使うようになってきたのではないかな。

○エビデンス

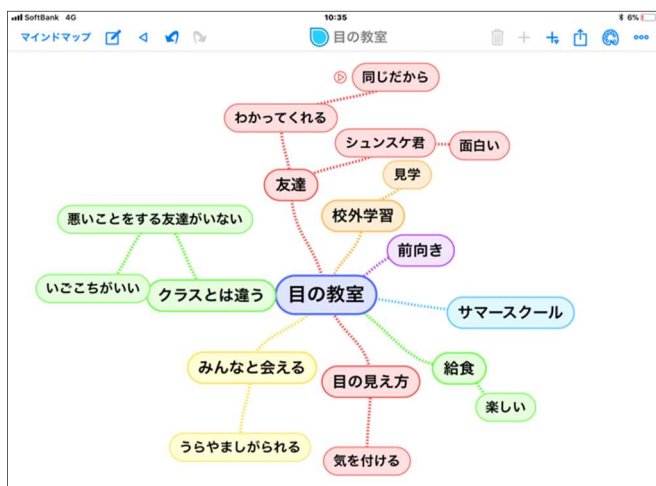
<①に関して>

自分を客観的にとらえようとする様子が分かるエピソード

1学期当初から、本児童は友達や家族など健常の人たちがどの程度見えるかについて何となく分かっているようであった。9月半ば、運動会の騎馬戦の練習を終えた放課後のこと、大将騎に乗っていた大将が誰なのか「分からなかった…」「みんなは知ってるから…（今さら聞けない）」と珍しく元気がなかった。普段は自分の見えにくさを特に隠すことなく学校生活を過ごしているが、自分は周りの友達とは違うということを感じる場面が少しずつ増えてきた。

10月末、弱視の状態に近い6年生男児との学習の中で、眼科の視力検査や弱視通級指導学級での教育的視機能評価で使用するランドルト環を用いて、改めて自分の見え方を調べた。それまで本児童は自分の視力値の数字を知っていたが、実際に0.08と1.0の視標を見比べたり、教室内の掲示物を例に比べたりすることで、より実感をもって自分の見え方を捉えることができた。周りの人の見え方と自分の見え方の違いを具体的に比較するようになった。

同じ見え方の友達がいて分かってくれる居心地のよさを
マインドマップに書いた



前向きに考えていることが分かる
本児童のつぶやき

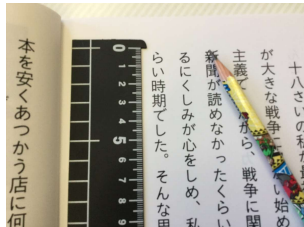
目が悪いのはしょうがないことだから、
じゃあどうするかって
考えるんです

図8 Simple Mind+「目の教室」より

自分が使っている拡大教科書や見えにくさからくる困難を紹介した

文字の大きさ(ポイント)

教科書22ポイント



体育の時

- ・勢いよく走るとき、地面がでこぼこしていると転びそうになる
- ・ドッチボールは、見学
- ・サッカーは、タイム係
- ・野球型は、攻撃参加、守備外野
- ・水泳は、得意

図9 自己紹介カードより

周りの人との関係の中で自分を客観的にとらえるようになった

	5月	2月
自分のどんなところが好きですか	あきらめないところ	みんなと行動できたところ (自分勝手なことをしない)
自分のどんなところがきらいですか	よく見ないところ	よくないことと分かってても反論できないところ
自分のいいところは何でしょう	友達にやさしくするところ	友達同士ささえ合うところ (勉強を教え合う、気持ちも支え合う)

図10 自己認識の学習シート(5月・2月)より

友達とのかかわりの中で自分を見つめようとする様子が分かるエピソード

学級の中に気心の知れた友達ができ、以前よりもさらに本児童の表情がよくなった。自分の嫌いなところについても、かかわりの中で考え、悩んでいることがうかがえる。

2月の体育の時間、ハンドボールのゲームに向けてペアでパス練習をするとき、本児童は支援に入った教員ではなく仲良しの友達とペアになりたいと言った。体育に限らず2人組で活動するときはその友達と一緒にペアを組むことが多かった。ゴム製の硬いドッジボールを使った素早いランニングパスの練習だと説明を聞いても、「大丈夫です、〇〇君は僕のことを分かっていますから(軽く投げてくれます)」と。休み時間の遊びとは違い体育の学習であること、自分にとって運動の学習があるのと同じく〇〇君にも運動の学習があることを考えるよう促した。授業後、在籍学級担任と、お互いに相手を思いやり尊重し合う関係を作るにはまだもう少し時間が必要かもしれないと話し合った。

<②に関して>

単眼鏡の操作技能の向上に自信をもっていることを作文に書いた



図11 作文の下書きより①

他校の児童が大勢いる中でも臆せず
iPad を使ってみんなと観戦した



図12 連合陸上大会で iPad mini を使って観戦

日々の授業で単眼鏡を使いこなして
学習していることが分かる
在籍学級担任のコメント

「授業中、単眼鏡をよく使って
やってます」

単眼鏡や iPad、パソコンなどの視覚補助機器の
操作技能の向上

必要な視覚補助機器を
人前でも使用しようとする気持ちの変化

自分に必要な、使える選択肢が増える

目的に合わせて視覚補助機器を選んで使うようになってきた

【今後に向けて】

5年生の1学期に実施した弱視理解教育で、在籍学級の中で本児童の見えにくさについて理解が広がった。6年生となった今年度は、見えにくさもある本児童を深く理解する友達ができ、休み時間に友達とじゃれ合う本児童は生き生きしている。友達とのかかわりの中で笑い、悩み、成長している。

「見えにくさもある自分」についての自己認識を高めるとともに、自分の力でできることはしっかり行い、難しいことには周りの人に援助依頼ができるように、本児童のゆっくりした歩みに合わせて支援を行ってきた。視覚にハンデがある本児童が自立していく上でICT機器は非常に有効な道具になると考えられる。盲学校へ進学後は学び方が多少変わることが考えられるが、現在、iPadを生活の中に取り入れて、便利な道具の一つとして活用とする力がついてきた本児童の学びがさらに確かなものとなるように、進学する盲学校と連携し移行支援を行っていきたい。

て	中	で	せ	の	い	す	み
も	学	す	ツ	一	ろ	新	な
が	生	す	ワ	つ	な	し	こ
ん	に	ぼ	で	で	え	い	が
ば	な	く	や	す	と	友	あ
り	り	は	る	も	ち	達	り
たい	たい	は	競	う	一	と	ま
い	い	す	技	一	で	弱	ま
と	で	で	を	つ	や	び	り
思	す	く	や	は	る	く	留
い	い	が	る	の	の	た	宿
ま	中	ん	の	パ	が	リ	舎
す	学	ば	が	ラ	集	い	生
	に	り	集	リ	し	い	活
	行	や	し	ン	み	ろ	で
	っ	な	み				

図 1 3 作文の下書きより②